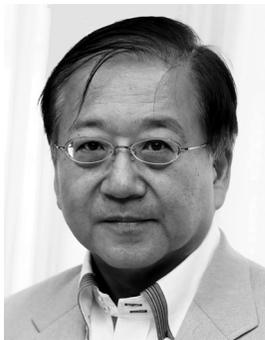


南海トラフ巨大地震と対応策の課題

東海大学教授・海洋研究所長 長尾年恭

- * 国の予算が非常に少ない地震予知研究
- * 臨時情報の出し方をどうするか
- * 南海トラフと東日本大震災の観測上の違い
- * 発生前に予想される前兆すべり
- * 進歩した地震予知研究の現状
- * 電離層電子密度の異常という新発見
- * 日本の地震予知に豪州での観測が寄与
- * 電離層を活用した防災、減災情報の育成
- * RTM法で知る「嵐の前の静けさ」
- * 南海トラフを困難にしない努力と工夫を



柴生田 それでは開会いたします。（拍手）

昨今も日本は災害続きでございますが、皆さん一番ご興味があるのは南海トラフ巨大地震がいつどういう形で来るかということだと思います。すっかりおなじみになりましたが、本日は東海大学海洋研究所長の長尾先生においでいただきました。最近大きな地震がありませんが、そう遠くない未来に確実にやってくるということでございますので、そのお話を伺って覚悟を新たにさせていただくということで企画いたしました。それでは長尾先生よろしく願います。（拍手）

国の予算が非常に少ない地震予知研究

長尾 ただいまご紹介にあずかりました東海

大の長尾です。ちょうど2年前にこの会にお呼びいただきましたが、それ以降、どういうことが起きたのかということと、最近の状況をお話ししたいと思います。

私は普段は勤務地は静岡、三保半島で働いております。現在は海洋研究所の所長と地震予知・火山津波研究部門長をしております。そのほかいろいろな役職をしておりますけれども、去年から日本地震予知学会の会長をしております。これは日本地震学会が地震予知はなかなか難しいということで、予知ということが基本的には棚上げとなりましたので、新しい学会を作りました。それから、国際測地学・地球物理学連合（IUGG）の地震・火山噴火に関する電磁現象WGの委員長を務めさせていただいてお